笠井 美優（数学教育コース）

# 舞台役者として

## １．教育を考える一言

「教壇に立つ時は、自分は役者なんだと思って。」

## ２．背景

この言葉は、教育実習の際に指導していただいていたＩ先生からいただいたものです。私は高校１年生の数学を担当していました。授業実習中、授業内容や進行ペースなどに関しては特に大きな問題もなく進められていたのですが、どうにも授業におけるメリハリをつけるのが苦手で、淡々と進めていってしまっていたところがありました。そんな自分にＩ先生がくださったアドバイスが、「教壇に立ったときは、いかにして生徒を惹きつけるかを考えたら良い。先生の一言で、生徒はドキドキしたり、不安になったり、安心したりするから。自分は舞台に立っている役者なんだと思って、大げさなくらいのアクションで、印象付けたら良い。」といったものでした。Ｉ先生は、授業の際に生徒に注目してもらいたいというタイミングでは大きな声で必ず「ホレ、こっち見てみ？ペンは置いといて、こっち見てみ？」と繰り返す先生でした。初めて、教室の後ろから先生の授業を参観させていただいていた中で見た光景は、圧巻でした。その言葉が発せられると、生徒たちが一斉に机から顔を上げて、教壇に立つ先生を見るのです。実習は５月末からだったので､Ｉ先生の担当クラスの生徒たちも先生と出会ってからふた月も経っていないような時期であったにも関わらず、学園祭用に作っていたクラスＴシャツには「ホレ、こっちみてみ？」の文字が入っていて、生徒たちにとっても、その言葉や先生自身がとても印象付けられていたのだと感じられました。アドバイスをいただいてから改めてＩ先生の授業を思い出すと、確かにそこは舞台の上で､先生が観客である生徒たちを授業という舞台に引き込む役者のように思えたのです。

## ３．考察

先生は印象付けの観点から教師を役者として例えていらっしゃいましたが、同時に、数学科の指導自体が劇のようなものでもあります。一つの授業の中での一貫した主題が舞台で見られるお話、簡単な具体例から、発展、一般化の流れを作り、最後にきちんとまとめをするということは、そのお話の中の起承転結です。舞台が面白いものかそうでないか、お話の中身をいかに劇的に印象付けるかは、舞台を進める役者である教師によるでしょう。ときには観客を客席から舞台に上げて、一緒に舞台を作ることもできるでしょう。そのように、生徒には楽しい舞台だと感じさせながら、数学の授業を行えるような教師になりたい。そう思わせてもらえた一言でした。

**引用参考文献**

吉田稔「日本の算数･数学の授業についての覚え書きー共通題目による日米の授業比較を通して」、三輪辰郎編著『日本とアメリカの数学的問題解決の指導』東洋館出版社、1992 年